



2022年2月

一年で最も寒さが厳しくなるという大寒が過ぎ、暖かくなることを期待していますが、今年はまだまだ寒さ厳しいですね。みなさん体調管理には気を付けて今年の冬も乗り切りましょう！

さて、今回ご紹介する本は、『ゾウの鼻はなぜ長い』加藤由子著 講談社 1996年です。この本は、様々な動物の疑問を解説しています。例えば、タイトルにもなっていますが“ゾウの鼻が長い理由”など約30項目の動物に関する疑問を解説しています。ここで、クイズです。走るのが一番得意な動物は何だと思えますか？ “指の数の少ないものほど走るのが得意”というのがヒントになるのですが、わかるでしょうか？ 答えはぜひこの本を見て確かめてみてください。指1本や2本、3本の動物がいることがわかりますよ。

特に、興味をそそられた解説は二つあります。一つ目が、シカやウシの角についてです。生えかわる角と、生え変わらない角があるということ。シカのように、角がオスにしかなく、枝分かれしているものは、毎年新しい角に生えかわります。一方、ウシのように角がオス・メス両方にあり、枝分かれのないものは、一生、生えかわることがないのだそう。例外として、メスにも角があるトナカイ（シカの仲間）は生えかわります。シカの仲間は角が生えかわり、ウシの仲間は角が生えかわらないと覚えておくといいそうです。

二つ目は、“ウサギの目はなぜ赤い？”です。ウサギは、体に色がついていると目が黒色や茶色で、体が真っ白なウサギは目が赤いのです。実は、体に色素を持っていないウサギの場合、毛の色は白くなり、そして目にも色が無いので、血の色が透けて赤く見えていたのです。“野山にいるウサギは冬になると白くなるが、そのウサギの目はどうなっているのか？”という疑問も解説してくれています。そもそも、ウサギの種類は大きく分けて2つあります。アナウサギとノウサギです。家畜用のアナウサギは、地面に穴を掘って巣を作り、赤裸で目の開いていない子どもを生まります。野生のノウサギは巣を作らず、毛が生え目を開いた子どもを生まります。アナウサギは、もともと日本に住んではいないウサギで、昔から日本の野山に住んでいるのは、ノウサギです。トウホクノウサギやサドノウサギは、夏の間、茶色の毛をしていますが、雪の積もる季節になると白くなります。周りの色に自分の色を合わせることで、敵に見つかりにくくなる白い毛のノウサギと、体に色素がない白い毛のアナウサギとは別なのです。冬に白くなるウサギの目は……黒のままなんですよ。

私が小学生の頃、飼育係を担当し、ウサギを間近で見ていると、白い毛のウサギだけ目が赤いことに疑問を抱いていたので謎が解けてスッキリしました。シカといえば奈良ですが、10月頃に春日大社で行われる“鹿の角きり”はご存知でしょうか？近年はコロナの影響で行事が中止になっているようですが、危険防止のための伝統行事です。この本にも書かれていますが、シカの角は完成すると血が通わなくなるそうです。シカは角を切られても痛みを感じないのはそういうことだったのかと納得できます。

動物が環境に順応して生きていることを、改めて感じるができます。この本で登場した動物を見た時、解説を思い出してみるとおもしろいと思います。

